避難スイッチ再考

東洋大学理工学部　学生会員　○上野太一
東洋大学理工学部　正 会 員　　及川　康

１．はじめに

たとえば河川洪水時の避難問題などを対象に，住民の避難率の低さや遅延を防止する方策のひとつとして「避難スイッチ」[1),2)]が提案されており，その効果や実践的価値などは既に広く知られるところとなっている．この点に関しては，疑う余地はほとんど見当たらず，本稿も強く賛同するところである．しかし，ここではより根源的に，住民が行動を開始するための単なる「目安」あるいは「基準」に過ぎなかったはずの概念を「スイッチ」と呼び直しただけなのに，それによってなぜ，前述のような効果や実践的価値が生じ得るのかという疑問点について，再考を試みてみたい．

２．問題意識

もちろん，竹之内らの議論 [1), 2)]を概観しても明らかなように，「避難スイッチ」の概念は単なる「呼び方の変更」という表層的な手続きのみに留まる概念ではけっしてなく，当該のスイッチ（あるいは目安，基準など）を誰がどのように定めるのかといった観点からの議論をより重視するものである．すなわち，「避難スイッチ」という呼称へと変更する過程を介して，当該の案件が「自分ごと」としての色彩を強めるのか，それとも，依然として「他人ごと」のままなのか，という点を多分に重視する概念（議論）であることは明らかである．換言するなら，当該案件を「他人ごと」から「自分ごと」化する過程からの成果物を「避難スイッチ」と呼称しようという提案なのである．このような見立てについて，あらためて**表-1** のように整理するならば，目安もスイッチも何もなかった状態（いわばパタン⓪）から，「パタン④：自分がスイッチを定める」の状態を目指す営みとして位置付けることができよう．

繰り返しになるが，このパタン④の状態が，住民の避難率の低さや遅延を防止するための方策のひとつとして効果を発揮し得る点に関しては，論を待たない．しかし，もしも「パタン③：他人がスイッチを定める」の状態においても同様の効果を発揮するのであるならば，前述の問題提起のとおり，その効果は「誰が定めるか」の如何によらず単なる「呼び方の変更」によってもたらされたものである，という見立てが濃厚となろう．「スイッチ」という表現が含み持つと思われる固有で独特のニュアンスによるものである，との見立ても可能かもしれない．他方，パタン④とパタン②においてのみその効果が発揮されるというのなら，その効果は「呼び方」の如何によらず単に「誰が定めるのか」という点のみの議論，すなわち，当該案件が「自分ごと」と化しているならばそこでわざわざ「スイッチ」などと呼び直さなくともよい，という見立てが濃厚となろう．

表-1　［呼び方］と［誰が定めるか］のパタン

		［誰が定めるか］	
		自分 【self】	他人 【other】
［呼び方］	スイッチ 【SWT】	パタン④ 自分がスイッチを定める場合 【self-SWT】	パタン③ 他人がスイッチを定める場合 【other-SWT】
	その他 （例えば「目安」） 【CRT】	パタン② 自分が目安を定める場合 【self-CRT】	パタン① 他人が目安を定める場合 【other-CRT】

「避難スイッチ」の効果やその利活用方策に関する議論は既に様々存在するものの，以上のような問題提起に対して直接的な回答を与える議論は著者の知る限り見受けられない．本稿は，この点に関してアンケート調査に基づいて検証した結果を報告するものである．

３．調査による検証結果

調査は 2023 年 10 月 12 日～18 日にかけてインターネットアンケート形式にて行い，957 件（性別と年代別（39 歳未満/40～59 歳/60 歳以上）で各 100 件以上）の回答を得た．調査の手順は**図-1** に示すとおりであり，パタン①～④の各条件下での避難意向の回答を要請した．**図-2** はその回答結果（避難意向の平均値）を示し

キーワード：避難スイッチ，自分ごと，他人ごと，避難行動
連絡先：〒350-8585 埼玉県川越市鯨井 2100 東洋大学理工学部都市環境デザイン学科,Tel：049-239-1407,E-mail：oikawa053@toyo.jp

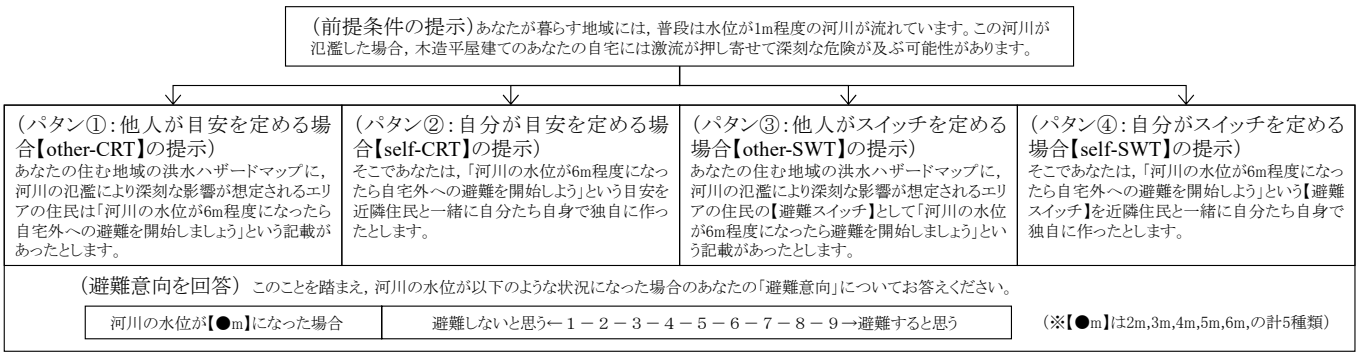

図-1 調査手順の概略

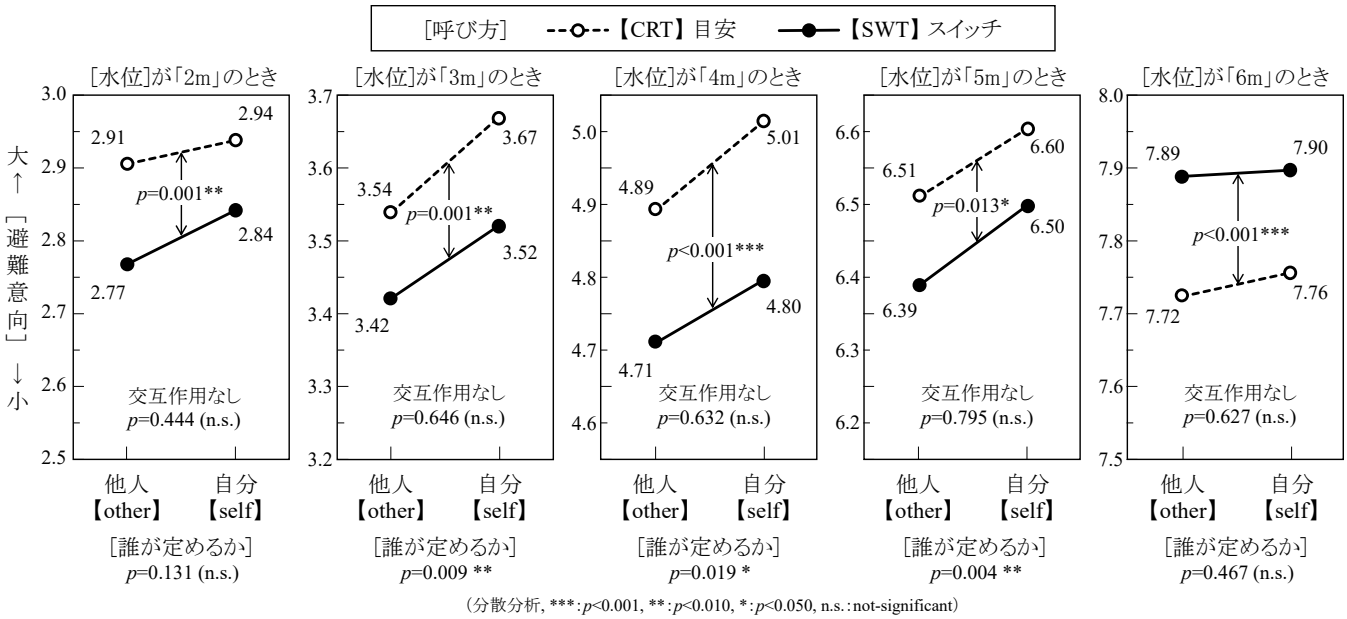

図-2 ［呼び方（目安/スイッチ）］と［誰が定めるか（他者/自分）］ごとにみる［各水位］での［避難意向］

たものである．これによれば，まず，提示される［水位］の上昇に伴い避難意向が高まる基本的動向が確認されるが，より着目すべき点は大きく分けて２つある．

一点目は，目安およびスイッチとして定めた「6m」に水位が達した状況になると，そこでは，「誰が定めるか」に拠らず「スイッチ」という呼び方を用いることが避難行動を促進する効果が有意に作用しているということである．「避難スイッチ」の有効性があらためて確認されたと言えるだろう．二点目は，しかしながら，「スイッチ」という呼称を用いることが，目安およびスイッチとして定めた「6m」に水位が達するまでの直前期間における早めの避難行動をむしろ阻害・抑制する方向で作用していることが確認される．ただし，ここでは「他人」ごとではなく「自分」ごととして捉える場合において早期避難につながりやすい傾向にあることが伺える．総じて「スイッチ」という呼称は「避難行動にメリハリを与える」と括ることもできる．しかし，早期避難の喚起の観点からは「スイッチに従いさえすればよい」という，いわば「スイッチ待ち」の姿勢が生じてしまっているとするならば，注意が必要である．その導出過程を顧みること，すなわちそれはそもそも「目安」に過ぎなかったことについて顧みる姿勢を持っておくことも大事であると言えるだろう．

なお，本稿で検討したスイッチの内容は一例にすぎず，別の内容であった場合にはまた異なる結果となる可能性はある．また，別の呼称（「避難ボタン」など）についても検証を加えてみてもよいだろう．

参考文献

1) 竹之内健介，加納靖之，矢守克也:平成 29 年九州北部豪雨において地域独自の判断基準が果たした役割－災害時におけるスイッチ機能－，土木学会論文集 F6(安全問題)，pp.31-39，Vol.74，No.2，pp.I_31-I_39，2018.
2) 竹之内健介，矢守克也，千葉龍一，松田哲裕，泉谷依那:地域における防災スイッチの構築－宝塚市川面地区における実践を通じて－，災害情報，No. 18-1，pp.47-57，2020.